

田中正平における西洋音楽の受容

The Acceptance of Western Music in Syohei TANAKA

泉 健

Ken IZUMI

2010年11月2日受理

序

この10年余り“Ost=Asien”というドイツ語の月刊総合雑誌を手がかりとして、19世紀末から20世紀初頭のベルリンにおける音楽生活の様相を研究している。この間、おりおりの研究成果を発表してきた(泉健 2001、2002、2003、2004a-c、2005、2006、2007)。

この数年は、“Ost=Asien”に作品や論文などが掲載された森鷗外、北里闌、藤代禎助(素人)を取り上げてきた。すなわち森鷗外については、『舞姫』のドイツ語訳が、1908年から1909年にかけて“Ost=Asien”に連載されたことを紹介し、これを復刻した(泉健 2008)。また北里闌については、彼が1901年に“Ost=Asien”に発表した「日本の演劇」を翻訳し、20世紀初頭のベルリンで、日本の演劇の歴史の概要が紹介されていたことを論じた(泉健 2009)。そして藤代禎助(素人)については、瀧廉太郎と玉井喜作との接点を中心として、まずその生涯をたどってみた(泉健 2010)。そして現在、彼が“Ost=Asien”に発表した「オペレッタ 芸者」(1901年、通巻41号)を翻訳し、また彼が西洋音楽をどのように受容していったかなどを研究している。その結果は近々発表予定であるが、今回は、森鷗外と一緒に留学した田中正平のことを先に取り上げることにした。

1. 田中正平—日本における音楽学研究の先駆者

田中正平は1862年(文久2)に淡路島で生まれ、1945年(昭和20)に千葉県で亡くなった。83年間の長い人生であった。彼は新設間もない東京大学の理学部物理学科を卒業後、同大学の助教授となり、22歳の時にベルリンに留学した。当初の予定は3年であった。しかし期限後もそのままベルリンに留まり、帰国したのは15年後の1899年(明治32)、37歳の時であった。その間ベルリン時代には、「純正調の研究」という論文を『音楽学季刊誌』に発表して学位を得(1890年/明治23)、その理論に基づく純正調パイプオルガンを制作している。帰国後は鉄道省関係の仕事に就きながら、邦楽の研究を行った。晩年には純正調(純正律)の研究を再開し、何

台かの純正調オルガンを制作している。田中正平は、1890年頃の日本人としては、驚くほど深く西洋音楽史と音楽理論を学んでおり、日本における音楽学研究の先駆者の一人であったと言える。

2. 研究史

このような生涯を送った田中正平に関しては、これまで数々の紹介や研究がなされてきた。紹介の類には次のようなものがある。すなわち田中の近親者(浅川玉兔 1967)や出身地淡路島の郷土史家によるもの(菊川兼男 1968、1971)。直接の教え子(伊藤完夫 1968)や同時代を生きた人々によるもの(田辺尚雄1946a-c、1953b：235-247、1965：279-296、1968、1969a-c、遠藤宏 1948：99-103、堀内敬三 1977上：200-204、黒沢隆朝 1956：216-219、1972：265-269)。さらに田中の学生時代の同期の友人によるもの(田中館愛橘 1934a-b、1935、1940、1950)などである。また近年はマスコミによる伝記も現れている(天野健作 2002)。

一方、もう少し深く踏み込んで、田中正平の理論に言及する研究もなされてきた(西原稔 1992、東川清一 1987、白砂昭一 1986、吉川英史 1984、江崎公子 1979)。これらに対して、平塚知子の一連の研究は(平塚知子 1997、1998、1999、2001、2003、2004)¹⁾、田中正平の全業績の意味を、明治以降の日本音楽史の中に位置づけようとしたものであり、初めて田中の全体像を捉えたものと言える。本稿も田中の歴史的な位置づけの解釈に関して、平塚の研究に多くの示唆を得た。

さて、筆者がこの10数年研究を続けている“Ost=Asien”の発行者は、玉井喜作という日本人である。田中正平の生涯を玉井喜作との接点に注目して調べてみると、明治時代の日本における西洋音楽の受容の様相の一端が浮かび上がり、非常に興味深い。それは、現在筆者が研究している、19世紀末から20世紀初頭のベルリンにおける日本伝統音楽の受容の様相とも深く関連している問題である。さらに田中正平が純正調を研究し始めたきっかけを調べてみると、彼が西洋音楽を受容していく過程で、西洋音楽史のテクスチャーの変遷を音楽史の普遍的なパターンとみなしていたことが

浮かび上がってくる。すなわち、モノフォニーからポリフォニーへの展開を音楽史における普遍的な流れとみなし、将来日本の音楽においてもそのことが生じるであろうと考え、それが純正調研究の大きなきっかけとなっているのである。本稿では、田中正平が西洋音楽を受容していく過程で、その純正調の研究が開始されていく様相を明らかにしていきたい。²⁾

I. 修学時代から東京大学助教授就任まで

次の頁に田中正平の生涯を年表にしてまとめた。彼の生涯に関しては、すでに伊藤完夫(伊藤完夫 1968)、菊川兼男(菊川兼男 1968、1971)、平塚知子(平塚知子 1998)などによる研究がある。この年表の田中正平に関する部分は、主にそれらに基づいて作成した。また本稿は玉井喜作との接点に焦点を絞ったものなので、右側に玉井喜作の年譜を並記した。田中正平と玉井喜作の接点は2箇所存在する。一つは東京大学予備門時代。田中正平は教員、玉井喜作は学生であった。今一つは田中正平のベルリン時代最後の5年間である。この時期両者は同じベルリンの町に暮らしていた。

以下この年表を見ながら、玉井喜作との2箇所の接点に注目して、田中正平の生涯を振り返っていきたい。

1. 大阪外国語学校から東京英語学校へ

田中正平は1862年(文久2)に生まれた。明治維新の6年前で、文久2年の遣欧使節がヨーロッパに派遣された年である。生地は淡路島の南部であった。田中は幼児より聴覚が優れていたようで、人形浄瑠璃を好み、秋の虫を集めて虫の音のコンテストを行うというようなこともしていたそうである(伊藤完夫 1968:140)。彼が東京大学に入学するまでの修学過程は明確ではないが、次のような経緯を辿ったようである。すなわち、まず12歳の1874年頃に大阪外国語学校に入学した。これは後の旧制第三高等学校の前身である。その後東京英語学校に転学したが、これは後に東京大学予備門となり、さらに後に旧制第一高等学校となる。田中正平の子息の話では、田中は旧制第一高等学校と第三高等学校の同窓会員であったということであるが(菊川兼男 1971:7)、それは以上のような経歴によるものである。

地球物理学者田中館愛橘は、東京大学理学部物理学科で田中正平と同期であった。彼は後年次のように回想している。1876年(明治9)に「東京、大阪、広島、仙台、新潟にあった英語学校の上の方の生徒を試験して開成学校に入れて、それきり英語学校を廃して仕舞った」(田中館愛橘 1934a:258)。田中正平がこの時に大阪から東京に移ってきたのか、それ以前に東京英語学校に入っていたのかは不明である。次の写真1は1877年(明治10)頃の写真であり、田中正平が開成学校の学生時代のものである(田中館愛橘 1935:167よ

り)。



写真1 明治10年頃開成学校時代の田中正平
『科学』(岩波書店)1935年5巻4号p.167より
後列左より田中館愛橘、石川千代松、藤澤利喜太郎
前列左より田中正平、中原貞三郎

田中正平が東京大学に入学したのは、1878年(明治11)のことであった。ここで東京大学の創立当時の学制の様子を振り返ってみると、次のようになっていた。1877年(明治10)4月に、東京開成学校と東京医学校の両校を併せて東京大学が成立した。当時はまだ初等・中等の普通教育が未発達であったために、この時同時に、東京英語学校と東京開成学校普通科(予科)を合併して東京大学予備門とした。東京大学予備門は、東京大学の法学部・理学部・文学部進学者のための独占的予備教育機関であり、修行年限は4年であった(泉健 2010:37)。一方医学部は、別に修行年限5年の予科を設けて予備教育を行っていた。この医学部の予科は、1882年(明治15)の6月に東京大学予備門に吸収されている。その際、従来の予備門の学科を本學学科とし、医学部予科の学科を分學学科と称することになった(第一高等學校編 1939:4、東京大学百年史編集委員会 1984:567-569)。

2. 東京大学予備門の本學学科と分學学科

予備門の本學学科と分學学科という区分けのイメージは、現在では理解しにくいだが、当時はかなり現実的な意味を持っていたようである。森鷗外は田中正平と同じ年、1884年(明治17)に私費でドイツに留学した(渡辺實 1977:516)。彼の『獨逸日記』に、北里柴三郎と田中正平が、この件をめぐってベルリンで口論する場面がある。1886年(明治19)年2月25日の所である。「北里柴三郎田中正平と争論したり。北里の曰く、凡そ三學部(法学部・理学部・文学部)の卒業生は醫學部

田中正平・玉井喜作年譜

西暦	和暦	歳	田 中 正 平	玉 井 喜 作	
1862	文久2	0	兵庫県三原郡賀集村に生まれる(現南あわじ市賀集立川瀬)	山口県三井村に生まれる (現山口県光市)	
1866	慶応2				
1874	明治7	12	この頃大阪外国語学校(後の旧制第三高等学校)に入学の模様。その後東京英語学校(後の東京大学予備門、さらに後の旧制第一高等学校)に入学した様子	2月東京本郷の獨逸学校 に入学した後、11月東京 大学医学部予科入学	
1877	明治10	15	4月東京開成学校と東京医学校を合併して東京大学成立		
1878	明治11	16	9月東京大学理学部入学		
1881	明治14				
1882	明治15	20	7月東京大学理学部物理学科卒業、8月同大学予備門教諭		
1883	明治16	21	12月東京大学助教授、同大学予備門教諭兼任		
1884	明治17	22	8月物理学(音響学・磁気学)研究のため満3年間の予定でドイツ留学に出発。10月11日ベルリン到着。ベルリン大学でヘルムホルツ,H.L.F.v.に師事		
1888	明治21				6月から札幌農学校で ドイツ語を教え始める
1890	明治23	28	「純正調の研究」を『音楽学季刊誌』6号に発表。純正調オルガンを発明。ビューロ、H.v.がエンハルモニウムと命名。この頃ウィーンでブルックナー,A.と会う		シベリヤ横断に出発
1891	明治24	29	8月理学博士の学位授与		
1892	明治25				
1893	明治26	31	4月純正調パイプオルガン完成。9月ドイツ皇帝主催の純正調パイプオルガン演奏会開催		
1894	明治27				
1895	明治28	33	この頃から1899年頃まで鉄道機械学の研究を行う	2月ベルリン到着 ベルリン大学在籍 ベルリン大学在籍 『シベリア隊商紀行』出版 3月“Ost=Asien”創刊	
1896	明治29				
1898	明治31				
1899	明治32	37	4月15年ぶりに帰国。1903年まで日本鉄道会社に勤務	9月ベルリンで死去 (享年40)	
1904	明治37	42	「我邦音楽の発達に就いて」『音楽管見』所収		
1906	明治39				
1907	明治40	45	7月美音会第一回演奏会。8月帝国鉄道庁勤務開始		
1908	明治41	46	10月山中たけと結婚		
1909	明治42	47	11月鉄道調査所代理		
1911	明治44	49	2月鉄道試験所長となる		
1913	大正2	51	5月鉄道省を退職し以後嘱託となる		
1921	大正10	59	邦楽調査委員(文部省よりの嘱託)		
1929	昭和4	67	鉄道省の嘱託を辞す		
1930	昭和5	68	この頃から純正調の研究を再開する。田中電機研究所を経営		
1932	昭和7	70	財団法人東京音楽協会理事長に推薦される		
1937	昭和12	75	純正調オルガン4台を制作。純正調オルガネットを創案		
1938	昭和13	76	純正調の研究により朝日文化賞を受賞		
1940	昭和15	78	『日本和声の基礎』出版		
1941	昭和16	79	国民精神文化研究所の音楽研究の嘱託となる		
1943	昭和18	81	教学練成所の音楽研究の嘱託となる		
1945	昭和20	83	10月16日千葉県の疎開先で死去		
1963	昭和38			『シベリア隊商紀行』 邦訳出版	
1968	昭和43		伊藤完夫『田中正平と純正調』	湯郷将和『キサク・タマイの冒険』 大島幹雄『シベリア漂流 —玉井喜作の生涯』 泉健“Ost=Asien” 全139号目次翻訳	
1969	昭和44		2月田中正平博士顕彰会発足		
1971	昭和46		11月淡路島に田中正平博士顕彰碑建立。菊川兼男『世界的音響学者田中正平博士』		
1989	平成1				
1997	平成9		平塚知子「田中正平の音楽観と音楽活動—日本音楽の再認識におけるその影響」		
1998	平成10		平塚知子「「発達」する日本音楽—田中正平の理想と実践をめぐって—」		
2002	平成14		天野健作「ドイツ皇帝絶讃のオルガン発明者田中正平」『日本人の足跡3』		

田中正平に関する項目は、伊藤完夫『田中正平と純正調』(1968)、菊川兼男『世界的音響学者 田中正平博士』(1971)、平塚知子「「発達」する日本音楽—田中正平の理想と現実をめぐって—」(1998)に基づいて作成。

の卒業生を蔑視す。余其何の意なるを知らず云々。北里の言或は当たる所も有る可けれど、……」(森林太郎 1975b: 131、()は筆者挿入)の部分である。このように、当時は予備門で本學学科を学んだ法学部・理学部・文学部の卒業生と、分學学科を学んだ医学部の卒業生の関係は、このようなニュアンスで捉えられていたようである。

3. 東京大学理学部時代の田中正平

ここで田中正平の東京大学における学生時代を振り返ってみよう。田中と同期で物理学科に籍をおいたのは、田中館愛橘(1856-1952 地球物理学者)と藤澤利喜太郎(1861-1933 数学者)の2人であった。物理の教師はアメリカから来たお雇い外国人メンデンホール、T.C. (Mendenhall, Thomas Corwin 1841-1924)で、彼はこの「3人を非常に可愛がって指導」(田中館愛橘 1934b: 354)した。音楽で使用する音は物理的な現象でもあるので、メンデンホールは、物理を学ぶためには音楽理論を知ること必要と考えていたようである。大学の「物理の教室に小さなオルガンがあった」(上野益三 1968: 252)ことは幸いであった。

メンデンホール自身音楽を好み、土曜日の晩にはいつも学生を自宅に呼び、ヴァイオリンを弾きながら音名、音程、音階、純正調のハーモニーの理論などを丁寧に教え、さらにお茶とケーキを振る舞ったということである(田中館愛橘 1950: 319)。その時には「唱歌の教を受けた」(田中正平 1940a: 34)と後年田中自身が述べている。もちろんこの唱歌とは、いわゆる日本の文部省唱歌ではなく、アメリカの歌であった。このような練習の結果、田中館愛橘と田中正平が「工部

大学で演奏をした」(遠藤宏 1948: 103)こともあったという。メンデンホールは1881年(明治14)に帰国し、30年後の1911年(明治44)に日本を再訪している。その時に田中館愛橘などが歓迎会を開き、学生時代に彼から習った歌「Come to dinner……」を一同で歌うと、彼も一緒に歌って大変喜んだ(上野益三 1968: 252)ということである。

メンデンホールは、オハイオ州東部の片田舎ハノヴァートン近郊で、開拓者の3男として生まれた。ハノヴァートンは、クリーブランドとピッツバーグのほぼ中間に位置する町である。彼は独学で数学や物理学を学んだ人物で、確かに「世界的な物理学者ではなかったにしても、……日本における物理学教育ならびに研究の基礎をひらくという偉業をなしたとげた」(渡辺正雄 1966: 117)のであった。次の写真2は田中正平の大学卒業記念の折のものである(田中館愛橘 1934b: 356より)。最前列右から2人目に田中館愛橘、前から2列目の右から3人目が田中正平、最後列右から3人目が藤澤利喜太郎である。

これは少し後の話であるが、田中正平の後輩に当たる音楽学者田辺尚雄は、1904年(明治37)に東京帝国大学理科大学理論物理学科に入学した。彼は、学生時代に恩師田中館愛橘の自宅で行われた家庭音楽会の様子を、次のように書いている。ある時、同じく恩師にあたる田丸卓郎と寺田寅彦が来訪した。田中館愛橘はフルート、田丸卓郎はピアノ、寺田寅彦はヴァイオリンが得意で、三重奏などを行っていたという話である。田丸卓郎はピアノと声楽を好み、シューベルトをよく演奏していたという(田辺尚雄 1965: 264-266)。田丸は、瀧廉太郎がライブツィヒを去るときの送別会の写



写真2 1915年(明治15)7月5日卒業記念写真
『科学』(岩波書店)1934年4巻8号 p.356より
前から2列目の右から3人目が田中正平

真にも写っている(泉健 2010: 42)。寺田寅彦は、『吾輩は猫である』の水島寒月のモデルであると言われていた。また個人で外国からフルートを取り寄せたのは、田中館が最初であったらしい(遠藤宏 1948: 103)。田中館、田丸、寺田、いずれも物理学が専門であるが、このような家庭音楽会をしていた。日露戦争の頃の、日本における西洋音楽の受容のひとつまでである。

4. 田中正平と玉井喜作の第一の接点

田中正平は理学部卒業後、1882年(明治15)8月に東京大学予備門教諭となり、1883年12月には東京大学助教授に就任している。予備門教諭の職は、1884年(明治17)8月にドイツに留学するまで続いていた。一方、玉井喜作の当時の経歴の確かな記録としては、1888年(明治21)6月に札幌農学校に就職する際、同校に提出した本人自筆の履歴書がある(玉井喜作 1888)。それによれば、玉井は1881年(明治14年)2月から11月まで本郷の独逸学校で学んだ後、同年11月に東京大学医学部予科に入学している(泉健 2010: 38)。この医学部予科は、既述のように翌1882年(明治15)の6月に東京大学予備門に吸収された。田中正平が予備門教諭になったのは、その2ヶ月後であった。

従って、田中正平が予備門の教諭をしていた1882年(明治15)8月から、留学する1884年(明治17)8月までの2年間で、田中正平と玉井喜作の第一の接点となる。しかしこの間の両者における具体的な出来事などは何も記録されていない。その後玉井は、1888年(明治21)6月から札幌農学校にドイツ語の非常勤講師として赴任したので(泉健 2006: 27-30)、田中正平との接点は一旦途絶える。

II. ドイツ時代—純正調研究のきっかけ

1. ベルリン大学在籍期間

さて次に田中正平のベルリン時代を振り返ってみたい。明治時代のベルリン大学における日本人留学生の消息をまとめたハルトマン, R. の名簿によれば、田中を含め、同期の3人の留学時期と住所は次のようになっている。藤澤利喜太郎(1883冬学期—1884冬学期、Kruppstr. 8)、田中正平(1884冬学期—1887冬学期、Kruppstr. 8)、田中館愛橘(1890夏学期—1891冬学期、Charlottenburug, Kantstr. 5)(Hartmann, Rudolf 1997: 25, 61)。つまり藤澤と田中は、1884年(明治27)の冬学期には同じ下宿にいたことがわかる。

ティーアガルテンの中の戦勝記念塔から、北北東に向かって直線距離で約2km進んだ所にフリッツ・シュロス公園がある。その公園を囲む通りの一画がクルップ通りである。そこからベルリン大学までは、直線距離で約3kmなので、歩いて通える距離である。

田中館は3人の中では最後に留学している。彼の住んだシャルロッテンブルクのカント通りは、旧西ベル

リンのクアフルステンダム通りの一つ北にある大通りである。これは長い通りであるが、5番地は動物園駅側なので、大学までは直線距離で約6km余りである。藤澤と田中館は留学期間の終了とともに帰国したが、田中はその後もベルリンに住み続け、帰国したのは国を出てから15年後であった。

2. 純正調研究のきっかけ

田中正平は後年73歳の時と78歳の時に、純正調研究のきっかけや、自己の音楽学習体験を語っている(田中正平 1935, 1940a)。それらによれば、純正調研究のきっかけは次のようなものであった。学生時代にメンデンホールから、西洋音楽はすべて自然の法則に基づいているので完全な音楽であると言われた。するとそれ以外の音楽は不完全なものとなる。しかし自分は日本の音楽に親しみをもち、憧れもあったので、彼の言葉に不満を感じていた。そこにドイツ留学の許可が出たので、音響学を研究することにした。

田中がベルリン大学で師事したヘルムホルツ, H. L. F. v. (Helmholtz, Hermann Ludwig Ferdinand von 1821-1894)の言うには、長三和音は自然に与えられたものとみなして良い。しかし三和音の組み合わせは民族によって異なる。「人類文化の進むに従って又時と所を異にすることに依って、これは変わり得る性質を持っているものである」(田中正平 1935: 42)ということであった。そこで西洋音楽史を研究してみると、「西洋音楽のもととは、どうも純正調であることが解った。……将来には日本の我々どもの音楽習慣を基としてハーモニーをつくと云う事になると、どうしても音の根源に亘って研究しなければならんと云う念を興こしたので、純正調の事に没頭することになった」(田中正平 1935: 42、傍点・ふりがなは原文のまま)ということである。

つまり簡略化して言えば、長三和音のドミソは、確かに自然倍音の中に含まれるが、種々の三和音の組み合わせ方は西洋の方法が絶対ではない。それは民族ごとに異なる可能性があるろう、というのがヘルムホルツの見解であった。これに力を得て、日本の音楽が将来ポリフォニーとなった場合、そこにつける和声を考えるためには音の根源を十分に研究しなければならないであろうと考え、田中は純正調の研究に没頭したということである。

特に、田中がヘルムホルツに「将来日本の国民が進んで行く時に於ては何れハーモニーは要求されるだろう。そう致しました時にどう云うハーモニーの土台を作ったら宜いでしょうか」(田中正平 1940a: 35)と尋ねた時に、ヘルムホルツは次のように答えている。「それは無論純正調で行くより仕様がな……新しく和声を始めるのに何を苦しんで平均律を使うか」(田中正平 1940a: 35)。田中が純正調の研究を進める際に

強い後押しとなったのは、この言葉であった。

音程や音律に関する数学的考察は、古代ギリシャの昔から存在している。しかしそれらは、概してそれを受容する人間の反応とは切り離された、音響そのものに関する研究であった。ヘルムホルツの新しさは、生物としての人間が聴覚器官で音響をどのように受容するかという問題を、従来から存在する音響そのものの自然科学的考察と重ね合わせて研究したところにあった。そしてヘルムホルツは『音感覚論』(1863)を出版して、斯学の権威と認められていた。従って彼からの上記の言葉は、田中正平に大きな影響を与えたに違いない。

3. 日本音楽のポリフォニー化を予想した田中正平

田中正平が純正調の研究を開始したきっかけは、以上のようなことであった。しかしこの経緯に関しては、さらに説明が必要であろう。現在では、私たちは西洋音楽のテクスチャーの歴史を十分に理解している。すなわち、西洋音楽は単旋律のグレゴリオ聖歌から始まり、やがてそれが9世紀頃にポリフォニーとなる。最初は完全1度、完全8度、完全5度、完全4度のみが協和音とされていた。やがて15世紀半ば以降ルネサンスが始まると、3度と6度も美しい響きとして扱われるようになった。さらに17世紀から通奏低音様式のバロック時代が始まり、器楽曲の種々のジャンルが誕生していった。

18世紀半ば以降の150年は、ホモフォニー様式の古典派、ロマン派の音楽の時代である。その中で19世紀後半以降は、機能と和声次第に崩壊していく。ショパン、F.F.、リスト、F.の流れを汲むラテン的崩壊は、ドビュッシー、C.の印象主義へと展開し、ヴァーグナー、R.のトリスタン和音の流れを汲むゲルマン的崩壊は、シェーンベルク、A.の12音音楽へとつながっていく。さらに12音音楽は、第二次世界大戦後のセリー・アンテグラルへと展開していった。一方アメリカからは第二次世界大戦後に、従来のヨーロッパ的な約束事を全く無視するようなケージ、J.の偶然性の音楽も生まれてきた。

そしてこのようなテクスチャーの歴史において、音律もそれに対応して変わっていった。すなわちピュタゴラス音律、純正律、中全音律、ウェル・テンペラメント、平均律である。完全協和音程のみが美しいとされていた時代には、ピュタゴラス音律で十分間に合ったが、3度6度が加わってくると、純正律が必要となった。さらに転調を行うという必要性から、それを容易に可能にする中全音律が生まれた。バロック時代以降に鍵盤楽器で種々の転調が行われるようになると、中全音律をいっそう発展させたヴェルクマイスター、キルンベルガーなどの種々のウェル・テンペラメントが登場した。さらに19世紀後半以降、産業革命後の西

ヨーロッパでピアノが大量生産されるようになることによって、平均律が次第に一般化していった(平島達司 1983a-b、藤枝守 2007、小方厚 2007)。³⁾

以上のようなことは、今日では常識である。しかし、田中正平がドイツ留学に出発した1884年(明治17)前後の日本では、このような知識を持っていた日本人はおそらくいなかったであろう。ところが、田中正平は留学して数年の内に、西洋音楽史の概略と音律の歴史を学び、それを踏まえた上で純正調(純正律)の研究を行ったのである。従って「将来日本の国民が進んで行く時に於ては何れハーモニーは要求されるだろう」という発言の背後には、彼の脳裏には次のようなイメージが描かれていたと考えられる。

すなわち、西洋音楽は単旋律のグレゴリオ聖歌から、長い歳月を経てロマン派の豊饒な響きとなった。日本の音楽も今は単旋律であるが、やがてこのような長い時を経た後にはポリフォニーになっていくであろう、というイメージである。彼自身の言葉によれば、「西洋では今日の平均律になる迄には非常に困難な茨の道を辿ってきた……それでは西洋で六百年も、七百年も掛ってやるだけの経路を経て日本でも完全なるハーモニーの出来ないかと云うことを考えました」(田中正平 1940a: 36)ということである。

4. 当時の日本における音楽観と田中正平

これは、当時の日本においては誰も考えつかなかったようなことである。その頃の日本では、西洋音楽に対して3通りの立場があった。すなわち今後は、1. 西洋音楽のみを勉強すべし、2. 日本音楽のみを勉強すべし、3. 東西二洋の音楽を折衷すべしの3つである(伊沢修二・山住正己校注 1971: 4-5)。第一の考えは、西洋音楽はギリシャ以来の歴史を持ち、今や最高のものであるから、今さら東洋の遅れた音楽を学ぶ必要はないという意見である。第二は、民族ごとに音楽は異なるのであるから、西洋音楽を日本に移植するのは英語を国語にしようとするようなことで無益である。従って日本の音楽のみを学べば良いという意見である。第三は、上記2つの見解はいずれも極端なものであるから、東西二洋の音楽を折衷し、今日わが国に最適のものを制定すれば良いという意見である。

しかし既述のように、田中正平の考えはこの3つとは異なっていた。田中は当時の日本人としては、驚くほど深く西洋音楽の歴史や音楽理論を勉強していた。そして次節に述べるように、ベルリンで15年間、自身も演奏体験をしながら後期ロマン派の音楽に囲まれて生活した。そのロマン派の音楽の豊饒な響きに圧倒されつつ、西洋音楽史を深く学んでいく過程が、彼をして、モノフォニーからポリフォニーへとという西洋音楽の変遷を普遍的なものと考え、従ってそれは日本においても生じるであろうと考えさせるにいたったのであ

ろう。

5. 田中正平の音楽体験

さて、このようにして田中は純正調を研究することになったわけであるが、それには音の物理学的研究のみではなく、音楽の演奏能力や読譜力も必要になってくる。田中は学生時代に、メンデンホールから音楽理論の基礎と簡単な歌は学んでいる。しかし渡欧前の楽器経験としては、ヴァイオリンを半年くらい習っただけで、「技術的の素養は皆無と云っていい」（田中正平 1935：42）状態であった。そこでシュテルン音楽院（現在のベルリン芸術大学）に入り、ヴァイオリンを学んでオーケストラに加わった。またピアノも習っている。さらにブスラー, L. (Bussler, Ludwig 1838-1900) には、和声学や音楽形式論を学んだ。大学ではベラーマン, G.H. (Bellermann, Gottfried Heinrich 1832-1903) に対位法を学び、大学の合唱部にも入って歌っている（田中正平 1935：43）。

シュテルン音楽院への入学は、当時ドイツ最高のヴァイオリニストであったヨアヒム, J. (Joachim, Joseph 1831-1907) の推薦によるものであった。これは、大学の数学のクラスで、隣の席にヨアヒムの息子がいたことがきっかけであった。彼と知り合いになったことから、やがて田中はヨアヒム家と行き来するようになり、この推薦が実現した（田中正平 1935：46）。既述のように、19世紀後半以降、ピアノの大量生産と平行して平均律が次第に一般化していった。この過程においてヨアヒムの世代の弦楽器奏者は、ピアノとアンサンブルを行う際に生じる平均律の音との微妙なずれ、うなりに悩まされていたものと思われる。それが田中の純正調オルガンでは解消されたので、田中に対する評価が一層高まったのであろう。

また田中は在独15年の間に、たくさんのコンサートにも通っている。彼の言葉によれば、「透明な音楽が好きで……好んで教会に宗教音楽を聴きに行き……オラトリオの演奏がある時には勉強して行きました……「天地創造」「四季」などは透明なもので愉しむことが出来たので、こういうのは今に記憶に残っています」（田中正平 1935：44）ということである。当時のヨーロッパにおけるヴァーグナー, R. (1813-1883) の影響力も敏感に感じ取り、バイロイトでしか演奏されない「バルジファル」以外はほとんど観たという。しかも使われる和音と和声進行にはきわめて鋭敏に反応している。「タンホイザー」、「ローエングリン」は聴いても快感を得たが、「トリスタン」「神々の黄昏」は私にはとても受け入れられない」（田中正平 1935：44）と述べている。つまり、20世紀の12音音楽や、さらに後のセリー・アンテグラルにつながっていくトリスタン和音以後のヴァーグナーにはついていけなかったが、それ以前のものには快感を覚えたということである。これは

和声学を本格的に学び、特に古典派から前期ロマン派の音楽の和音に対する耳の受容力ができていたということを示している。

このように田中正平の音楽体験を振り返ってみると、彼は当時の日本人としてはかなり深く西洋音楽を体験していたことがわかる。単旋律のグレゴリオ聖歌からやがてポリフォニーができていく歴史をしっかりと把握し、ピアノとヴァイオリンもある程度学び、和声学、対位法、楽式論を修め、オーケストラに参加してヴァイオリンを弾き、コーラスにも加わり、多くのコンサートにも通う。こんな生活をベルリンで15年間送るうちに、彼はトリスタン和音以前、特に古典派から19世紀前半の西洋音楽に対する受容のフィルターを身につけていったものと思われる。「天地創造」「四季」を「透明なもの」と言っているのは、いわゆる古典派的な全音階的和声法の響きのことであろう。

Ⅲ. 純正調の研究と純正調パイプオルガン

1. 「純正調の研究」『音楽学季刊誌』第6巻, 1890年

さて以上のような経緯を経て、田中正平は1890年（明治23）に「純正調の研究」という論文を Vierteljahrsschrift für Musikwissenschaft（『音楽学季刊誌』）の第6巻に発表した（Shohé Tanaka 1890）。田中正平とともに留学した森鷗外が、日本で『舞姫』を発表したのはこの年であった。田中はこの論文により、ベルリン大学から哲学博士の学位を、また東京大学からは翌年理学博士の学位を授与されている。この論文は全体が4つの章に分かれ、第I章では純正調（純正律）の音体系について（Shohé Tanaka 1890：2-18）、第II章では純正調のオルガンについて（Shohé Tanaka 1890：18-34）。第III章では純正調の観点から振り返った過去の和声的な芸術について（Shohé Tanaka 1890：34-59）。第IV章では過去における鍵盤楽器に関して、純正調によるものとそれ以外の調整律的（temperiert）音律によるものの歴史について述べられている（Shohé Tanaka 1890：59-90）。彼自身の理論に基づいて制作された純正調のオルガンは、指揮者のビューロー, H.G.v. (Bulow, Hans Guido von 1830-1894) により「エンハルモニウム」と命名されたことも記されている（Shohé Tanaka 1890：23）。

この論文の中で引用されている著書、論文などを見ると、田中正平が、1890年（明治23）当時における音楽学の最新の知識や、音楽学に関する過去の基本的な文献、さらに学術的に校訂された作曲家全集などを踏まえた上でこれを書いたことがわかる。すなわち以下のような文献が引用されている。シュピッタ, J.A. の『バッハ, J.S.』（I, 1873, II, 1880）（Shohé Tanaka 1890：89）、エリス, A.J. の『音高の歴史』（1880）（Shohé Tanaka 1890：65）、キーゼヴェーター, R.G. の『音楽史』（1834）（Shohé Tanaka 1890：38）、アンブ

ロス, A.W. の『音楽史』(1862-) (Shohé Tanaka 1890 : 38)、フェティス, F.J. の『音楽家伝記および音楽一般書誌学』(1835-1844) (Shohé Tanaka 1890 : 74)、ヴィンターフェルト, C.G.V.v. の『G.ガブリエーリとその時代』(1834) (Shohé Tanaka 1890 : 52-54)、クスマケル, C.E.H.de の『中世の和声の歴史』(1852)と『中世音楽文書』(1864-1876) (Shohé Tanaka 1890 : 41)、グラレアヌス, H. の『ドデカコルドン』(1547) (Shohé Tanaka 1890 : 43)、ザルリーノ, G. の『音楽提要』(1558) (Shohé Tanaka 1890 : 43)、ガリレーイ, V. の『古代と今日の音楽に関する対話』(1581) (Shohé Tanaka 1890 : 46)、キルヒャーA. の『音楽汎論』(1650) (Shohé Tanaka 1890 : 73)、メルセンヌ, M. の『音楽汎論』(1630年代) (Shohé Tanaka 1890 : 90)、フックス, J.J. の『パルナッソス山への階梯』(1725) (Shohé Tanaka 1890 : 50)、バーニー, C. の『音楽通史 第2巻』(1782) (Shohé Tanaka 1890 : 39-40)、ハーペルル, F.X. 監修の『パレストリーナ全集』(33巻, 1862-1907) (Shohé Tanaka 1890 : 56) など枚挙に暇がないほどである。

また19世紀に創刊された音楽学の学術雑誌にも、当然目を通してゐる。すなわちクリュザンダー, K.F.F. の『音楽学年鑑』(1863, 1867) (Shohé Tanaka 1890 : 61)、アドラー他の『音楽学季刊誌』(1885-1894) (Shohé Tanaka 1890 : 65) などである。田中正平がこの論文を書いた1890年(明治23)に、これらの文献に触れた日本人はいなかったであろう。1879年(明治12)に音楽取調掛が創設され、『小学唱歌集』の初編から第3編までが揃ったのが1884年(明治17)。田中のこの論文は、それからわずか6年後に書かれているのである。

因みに田中正平のこの論文が掲載された『音楽学季刊誌』は、近代の音楽学の確立を告げる画期的な研究雑誌であった。これは、18世紀末以降本格的に始まった近代の実証主義的音楽史研究の高まりを背景に、1885年(明治18)に創刊された。その編集者は、アドラー, G. (Adler, Guido 1855-1941)、クリュザンダー, F. (Chrysander, Friedrich 1826-1901)、シュピッタ, A.P. (Spitta, Johann August Philipp 1841-1894) の3人であった。第1巻の巻頭には、アドラーの論文「音楽学の範囲、方法、目的」が掲載されている。音楽学的な思考そのものは古代ギリシャ以来存在するわけであるが、歴史主義に基づいた実証主義的な研究としての音楽学は、19世紀から本格的に始まった。この雑誌の創刊は、近代的な再出発を行った斯学の学としての確立を告げていると言える。そしてこの雑誌の創刊6年目の1890年第6巻に、全90ページにわたって掲載されたのが、田中正平のこの論文であった。従ってこれは、日本の音楽学の歴史においても画期的なことと言える。

2. 純正調パイプオルガン

田中正平はこの論文を書くとともに、同じ年に純正調による小型のリード・オルガンを制作している。さらにこの楽器のことは当時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世にも伝わり、皇帝の希望で大型の純正調パイプオルガンも作られることになった。その作業の開始は「1890年(明治23)12月」(平塚知子 2004 : 179)であり、オルガン製造会社のヴァルカー社と田中正平との共同で行われた。それが完成し、ベルリンのドロートンシュタット通りにあったギムナジウムに設置されたのは、「1893年(明治26)2月」(平塚知子 2004 : 179)であった。そして1893年9月にはその披露演奏会が開催されている。この時にはモーツァルト, W.A. の「Ave verum corpus」などが演奏され、そのプログラムは伊藤完夫の『田中正平と純正調』に掲載されている(伊藤完夫 1968 : 54-55)。

3. 世紀末ウィーンのブルックナーとブラームス

ところで、田中は「エンハルモニウム」を制作した後、しばらくしてウィーンに出かけ、この楽器を後期ロマン派の作曲家ブルックナー, J.A. (Bruckner, Josef Anton 1824-1896) に聴かせている。最晩年のブルックナーはその響きに熱中したということである(野村良雄 1968 : 134-135、平塚知子 1998 : 112-113)。

また田中が「エンハルモニウム」を制作した前年の1889年(明治22)には、ウィーンで56歳のブラームス, J. (Brahms, Johannes 1833-1897) が、エジソンの発明した蠟管蓄音機で「ハンガリー舞曲第1番」を録音している(毎日放送 1997)。この機械の発明は1877年(明治10)であった。最初は錫箔を巻いた円筒型の蓄音機であったが、1881年(明治14)に蠟管型が発明された。従ってブラームスの録音はその8年後であったことがわかる。因みに1947年(昭和22)のアメリカ映画『皇帝円舞曲』には、アメリカのセールスマンがウィーンに行き、新発明のこの蠟管蓄音機を売り込むという設定の物語が描かれている。まさにその頃の話である。

さらに、田中がベルリンで「エンハルモニウム」を制作した1890年(明治23)には、ブラームスはウィーンで箏曲「六段」を聴いているようである。その経緯は『過ぎし日のブラームス』(毎日放送 1997)に詳しい。それによれば、ブラームスの遺品に『日本の民族音楽』(ウィーン楽友協会蔵)という楽譜があり、これには「六段」「宮さん」など5曲の日本の音楽が収められている。その内、「六段」にはブラームス自身の書き込みがある。従って、誰かがブラームスの前でこの曲を弾き、それを聴いたブラームスが楽譜と実際の音との異同を書き込んだものと考えられる。当時ウィーンで箏曲「六段」を演奏できた日本人は、駐在公使戸田氏共うじたか(1854-1936)の妻の戸田きねこであった。彼女は岩倉具

視の長女であり、山田流箏曲をたしなんでいた。以上のような経緯で、ブラームスが「六段」を聴いたということである。因みに、当時のオーストリア駐在特命全権公使であった戸田氏共は、1887年(明治20)10月8日から1890年(明治23)9月19日までその職を勤めている(富田仁編 1989:付録II 46)。

ところでこの2年後、1892年(明治25)に59歳のブラームスが作曲した4つのピアノ曲(Op.116-119)には、彼独特の厚い和声書法ではなく、「枯淡の境地ともいべき内面の表出が」(根岸一美 1996:166)見られる。これには、彼が日本の音楽と接したことからの影響もあったのであろうか。19世紀末から20世紀初頭のベルリン、ウィーン、ミュンヘン、パリの諸都市は、世紀末文化によって通底していた。ウィーンでは、1873年(明治6)に開催された万国博覧会以降、ジャポニスムも広がっていた(パンツァー, P., クレイサ, J. 1990:19-71)。1890年前後のウィーンで、田中正平とブルックナー、箏曲「六段」とブラームスという出会いがあったことは興味深い。

IV. 田中正平と玉井喜作の第二の接点

1. ベルリン時代の田中正平と玉井喜作

さて、次に田中正平と玉井喜作の第二の接点を考えてみよう。115ページの年表にまとめてあるように、田中正平は1884年(明治17)10月11日にベルリンに到着し(森田太郎 1975a:83)、1899年(明治32)3月頃に帰国の途についている。従ってベルリンには14年と5ヶ月あまり住んでいたことになる。一方玉井喜作は1894年(明治27)2月にベルリンに到着するが、数ヶ月ハンブルクで暮らしている(泉健 2005:35)、ベルリンに定住し始めるのは同年6月頃からである。従って、両者が共にベルリンに居住していたのは、1894年(明治27)6月から1899年(明治32)3月までの約5年間である。つまり田中のベルリンでの最後の5年と、玉井のベルリンでの最初の5年が重なっていることになる。

玉井がベルリンに到着したのは、日清戦争が始まる6ヶ月前であった。ヨーロッパでは、極東情勢に関心のある人は別として、一般にはまだ日本という国がどこにあるかもあまり知られていなかった頃である。田中自身の言葉によれば、当時ベルリンに居住していた日本人は「80人乃至100人位」(田中正平 1940a:45)という状況であった。⁵⁾ここで両者が重なる5年間を振り返ってみよう。田中正平は純正調の研究論文を発表して博士の学位を取得し、純正調パイプオルガンも完成させて、音楽家ともういふん付き合いがあったようである。「一介の書生ですが、燕尾服の一揃ひもつくりました。三日にあげず燕尾服など着込んで出かけた事があります」(田中正平 1935:49)という状況であった。一方玉井は、1895年(明治28)夏学期から1896年夏学期までの3学期間、ベルリン大学法学部に在籍し

ている。その後、1898年(明治31)にドイツ語で『シベリア隊商紀行』を出版し、同年3月から“Ost=Asien”の刊行を開始する。その1年後に田中が帰国している。

このように両者の行動を比較してみると、玉井がベルリンに着いてから『シベリア隊商紀行』を出版する1898年初頭頃までは、両者の接触は無かったかもしれない。しかし“Ost=Asien”刊行後の1年あまりは、頻繁な交流は無かったとしても、両者はベルリンのどこかで出会っていたのではないかと思われる。当時のベルリンにおける80~100人の日本人は、独和会や日本クラブなどを通じて交流していたからである。また玉井家は、ベルリンの私設領事館とも言われたほどに日本人の出入りが多い所でもあった。『玉井喜作宅における寄せ書き』(泉巖 1986)は、そのような来訪者が自由に書き綴った寄せ書きである。ただ残念ながら、これは田中が帰国した翌年の1900年(明治33)から始まっているので、この寄せ書き帳には田中正平の名前は出てこない。

2. 玉井喜作追悼会

1) 玉井喜作追悼会発起人名簿

以上のように、両者がベルリンに同時に居住した5年間には、両者の出会いを物語る直接的な資料は今のところ見つかっていない。しかし、玉井喜作が1906年(明治39)9月にベルリンで死去した翌年、東京で玉井の追悼会が開催されている。田中の帰国後約8年経った頃である。実はその追悼会の発起人名簿の中に、田中正平の名前が記されているのである。このことは、ベルリンでの両者に何らかの接触があったことを物語っているのではないかと思われる。

この追悼会は、1907年(明治40)2月21日に東京上野の精養軒で開催された。それに先立ち、案内状が作成され、関係者に送られている。これは現在光市文化センターに所蔵されており、縦18.7cm横63.5cmの横長の紙である。田中正平の名前が出てくるのは、その中に書かれた発起人の箇所である。案内状の文面は次の通りである。この文章には句読点が全く無いので適宜補った。出欠届けの返送先の「長島」は「長嶋」の誤植であろう。

「拜啓 陳者故東亞主筆玉井喜作君遺族今回帰朝を好機とし、本月21日午後5時上野精養軒にて追悼会を催し度候に付き、万障御差操の上可成同君の知人御誘合され御臨席被成下度、此段御案内申上候

(会費金2円)

追而、御出席の有無は来る19日迄に京橋区築地3丁目14番地長島方迄御一報願上候

明治40年2月15日

そしてこの後に発起人57名の名前が以下のように記

されている。ただしこの名前の部分に書かれているのは氏名のみである。()内の肩書きなどは、各種事典(手塚晃・石島利男編 2003、富田仁編 1985、渡辺實 1977-1978など)で調査して、筆者が記入したものである。肩書き、専門はこの案内状が書かれた時点のものもあるが、後のものもある。この中で『玉井喜作宅における寄せ書き』(泉巖 1986)に登場した人物は、これまで拙稿(泉健 2004a、2005、2006、2007など)で詳しく紹介している。

発 起 人

磯部 正春(農商務省特許局長)
井上 密(京都帝国大学法科大学長)
泉谷 氏一(東京三越社員/写真部)
池田十三郎(朝鮮総督府通信局長官)
石川千代松(東京帝国大学農科大学教授)
入澤 達吉(東京帝国大学医科大学教授)
池田 龍一(日清生命保険株式会社社長)
飯田 精一(衆議院議員)
巖谷 季雄(作家、児童文学者)
廬 百壽(外交官)
林 嘩
原田 貞介(工学博士、土木学会会長)
服部甲子造
橋田 茂重(橋田内科病院長)
畑 良太郎
戸塚 機知(陸軍軍医、細菌学)
土肥 慶蔵(東京帝国大学教授)
大井菊太郎(陸軍大将、貴族院議員)
大村仁太郎(学習院独文科長)
大岡 育造(文部大臣)
小川滋二郎
太田 覚眠(本願寺僧侶)
小比木信六郎
岡田和一郎(東京帝国大学医科大学教授)
荻野萬之助(大倉組合台湾支店長)
柏村 貞一(宮内省侍医)
河村 博亮(玉井喜作の長女綾子の養家)
田代 義徳(東京帝国大学医科大学教授)
田所 美治(文部次官、貴族院議員)
田中 正平(理学博士、鉄道試験所長)
津軽 英麿(貴族院議員)
長岡 外史(陸軍中將、衆議院議員)
中谷 弘吉
長嶋鷲太郎(法律家)
村田峯次郎
宇都宮 鼎(海軍主計總監)
山田 三良(東京帝国大学法学部長)
伯爵 柳澤 保恵(統計学者、貴族院議員)
山根 正次(日本医学校校長、衆議院議員)

山田 鐵藏(東京慈恵会医学専門学校教授)
松岡 道治(京都帝国大学医科大学教授)
松井 茂(静岡・愛知各県知事、貴族院議員)
横田 麟一
小林 源蔵(衆議院議員)
小山 善
姉崎 正治(東京帝国大学教授、貴族院議員)
吾妻 勝剛(京都帝国大学医科大学教授)
朝倉 文三(東京慈恵会医科大学教授)
青木 徹二(法学博士、弁護士)
佐野 吉作(開業医・東京京橋)
齋藤十一郎(法学博士、関西大学長)
湯川 寛吉
宮本 叔(東京帝国大学医科大学教授)
森田 茂吉
元田 肇
守屋 伍造(開業医・東京赤坂)
鈴木 主税 殿

以上が発起人名簿である。

2) 『萬朝報』明治40年 2月22日

この追悼会の翌日の『萬朝報』1907年(明治40) 2月22日には、当夜の様子が綴られている。ここでその全文を復刻しておきたい。この文章にも句読点がほとんど無いので適宜補った。また改行は全くないので、筆者が文意に沿って改行した。氏名などの明らかな間違いは訂正した。()は原文のもの、[]は筆者の補いである。

『萬朝報』 明治40年 2月22日

「故玉井喜作氏追悼会

昨日午後6時30分より上野精養軒にて開きたるが、氏は獨逸伯林に於て雑誌東亜を発行しつつ、我留学生等の世話を懇切に為したる事とて、当日の来会者150名の多きに達し、而も殆ど獨逸婦りのハイカラ紳士にて、近来稀れに見るの盛会なりし。会員は多方面に亘り法律家、政治家、医家、軍人、学者、文士ありて、柳澤伯爵、石黒男[爵]、大岡育造、井上密、元田肇、山根正次、松井茂、津軽英麿、巖谷小波、太田覚眠及び井上(哲二郎)、芳賀、岡村、穂積(陳重)、高橋、松波、姉崎の諸博士、その他長岡少將、田所中佐等の顔も見受けられ、又日独郵報持主エルロン並びにブットマンの2外人もあり。

遺族は未亡人悦子(34 [歳])、長女綾子(19、河村家へ養子し当時日本女子大学生)、三女文子(15、次女韶子は17歳を以て一昨年伯林に死す)、四女喜代子(4)、長男太郎(2)、未亡人の姉房子(35)等の6人にして、他に、玉井氏の書生にて今回東亜主筆を引き継ぎたる老川茂信氏の父正行氏も列席せり。

かくて一同楼上に至り席定まるや、長嶋鷺太郎氏は開会の辞を述べ、更に玉井氏が赤手シベリアを過て伯林に至り此業起せし堅忍不拔の偉人なるを嘆賞し、又先年氏が妻子を伯林に迎える際に、予に宛てし依頼状に妻子を送るには下等切符にて宜し、その代り帰朝の節は玉井丸に乗せ錦を故郷に飾るべしとの大抱負ありしを追懐し、中途に斃たる不幸を悲しみ、次いで巖谷小波氏は遺子教育資金募集の趣意書を朗読せるが、その大意は、氏は我留学生を誘導すること頗る懇切にて、その主幹せる東亜編集所は留学生間に領事館と迄呼ばれたるに、事業半ばにして永眠したるが資産甚だ豊かならず。是れ吾人知友の補助を為すべき所以なりと云うにあり。

それより荻野氏の資金募集員の指名に次いで、本願寺布教師太田覚眠氏は、彼の日露の役玉井氏に救助慰藉せられし経歴を述べ、また氏の訃を、日露の役に氏の助けを受けしシベリア在住の邦人に通知せしに、無学なる田尻某女は平仮名にて書きたる悲しみの手紙に金1円を送り寄越し、外彼地より贈り来りたる金200余円は、未亡人の望みに応じ遺子教育金の内へ送たりと述べ、またエルロン氏は流暢なる自国語を以て玉井氏の死を悼める演説を為し、是に続き石黒男〔爵〕は、日露の役日本赤十字社に尽力せし功労に依り、特に有功賞下付になりし次第を涙ながらに紹介したり。

是れにて会食に移りしが、その半ばなりし頃、穂積博士及び大岡育造氏等は玉井氏の性質を演述して、その他二三の追悼演説ありて午後9時半散会したるが、此日未亡人は、愛子を左右にして玉井氏の写真を掲げたる正面の食卓につき居たるが、流石に悲しき堪えざりけん、ハンケチを顔に当ててヨヨとの声さえ漏れ聞ゆるに、喜代子と太郎との2子は頑是なく笑い戯るる無邪気さ、見る者をしてひとしお悲哀の感に堪えざらしめたり。』

以上が追悼会当日の様子である。この新聞記事の中では田中正平のことは述べられていないが、この追悼会名簿が、田中正平と玉井喜作のベルリンでの出会いを暗示している。

V. 田中正平の帰国後から晩年まで

1. 美音会・美音倶楽部

さて帰国後の田中正平は、鉄道省関係の職場に籍を置きながら、自らの理念に基づいて日本音楽の研究を続けている。既述のようにその理念とは、日本音楽の歴史に関する壮大な規模のものであった。すなわち、今はモノフォニーである日本の音楽も、今後長い時間が経過すればポリフォニーに発展していくと思われる。その時のために、安易に西洋音楽の和声法を借用するのではなく、純正調(純正律)に基づく和声法を準備しておかねばならない。また音楽環境も整えておかねば

ならないというような発想であった。

田中は帰国後5年目の1904年(明治37)に、「我邦音楽の発達に就いて」という論文を書いている(田中正平1904)。その中で、音楽環境を整えるためにいくつかのことを提唱している。すなわち、「時々演奏会を催して、広く国楽の趣味を味はしむること」(田中正平1904:54)や、「有力なる会合を組織して、国楽の保存を図り、且数多の方面に於いて音楽を奨励すること」(田中正平1904:54)や、「学校を興して国楽の教授を盛にするなど」(田中正平1904:54)である。

そしてこのような事業の展望に関しては、次のように述べている。「音楽の改良たるや、我邦大事業の一つであって、国民の全力を之に傾注するも、なかなか一朝一夕に之を遂行し得べきものではない。先ず差当り在来の音楽を保存し、其の害毒を除き、不便を去り、専ら之を普及するに力め、音楽家並に公衆をして、益々その趣味を高尚多様ならしめ、健全なる音楽的常識を養ひ、漸次に之が発達を図るの外はないのである」(田中正平1904:54)。

そしてその具体的な方法として、田中は「美音会」という組織を作り、邦楽の演奏会を開催している。田中のもとで学んだ田辺尚雄は、「正しい邦楽の芸術的価値を広く国民の間に認識せしめようとして(当時はインテリ階級の間に洋楽崇拜、邦楽排斥の思想がひろまっていたので)」(田辺尚雄1965:282-283、()は原著者田辺尚雄によるもの)、田中がこの会を設立したと述べている。ここでは春秋2回水準の高い邦楽の演奏会が開催された。また田中は「美音倶楽部」という組織も作っている。これは上記の「有力なる会合を組織して、国楽の保存を図り」に対応するものである。田辺尚雄によれば、これは「インテリ階級の家庭の人々に邦楽を娛しんでもらおうという目的を以て」(田辺尚雄1965:283)作られたものであった。

2. 邦楽の採譜・純正調の研究再び

一方帰国後の田中は、邦楽の五線譜化にも取り組んでいる。また67歳(1929年/昭和4)で鉄道省関係の仕事に一区切りつけた後は、再び純正調の研究も再開し、日本においても純正調オルガン4台を制作している。また1940年(昭和15)には、純正調理論に基づく『日本和声の基礎』(田中正平1940b)を出版した。そして第二次世界大戦直後、田中正平は1945年(昭和20)10月16日に疎開先の千葉県で亡くなった。その24年後、1969年(昭和44)2月には田中正平博士顕彰会が発足し、1971年(昭和46)11月に、生まれ故郷の淡路島に顕彰碑が建立された。その場所は、現在の南あわじ市賀集八幡南地区の、護国寺と賀集八幡神社のある所である。

終わりに

以前、山口県の光市文化センターで玉井喜作関係の

資料を調査していた時に、玉井の追悼会案内状に田中正平の名前を見つけて驚いたことがある。音楽学を専門とする筆者は、それ以来、両者の接点を詳しく調べてみようと思っていた。今回の論攷はその試論である。

ドイツにおいて1885年(明治18)に、今日の音楽学の確立を告げる学術雑誌『音楽学季刊誌』が創刊された。そのわずか5年後の1890年(明治23)に、田中正平は90ページにわたる論文「純正調の研究」をこの雑誌に発表し、ベルリン大学から哲学博士の学位を授与された。これは日本の音楽学の歴史において画期的なことであった。しかし富国強兵、殖産興業を第一とした明治以降の日本では、このような音楽学分野の研究は時勢にそぐわないものだったので、注目されることも少なかったものと思われる。明治以降は音楽分野においても、まず西洋音楽の実技を学び吸収するという考え方が主流であった。音楽学の研究は、それを行う課程すら存在しなかった。1879年(明治12)に設置された音楽取調掛が、今日の東京芸術大学のルーツであるが、そこにおいても、ピアノや声楽などの演奏分野の課程がまず成立している。作曲科ができたのは、ずっと後の1932年(昭和7)であった。音楽学を学ぶ楽理科の成立は1949年(昭和24)である。これは音楽取調掛の設置から数えてちょうど70年後のことであった(泉健 1996: 240-241)。このような事実は、田中正平が、音楽学分野での能力を十分に生かす機会を得られなかったことの原因の一つでもあろう。

それから、やはり田中正平の日本音楽の歴史に関する展望はあまりにも壮大過ぎて、周囲には理解されにくかったであろうと思われる。その展望の根源には、日本音楽も長い時間を経れば、やがてモノフォニーからポリフォニーになるであろうという発想があった。その考え方が生まれた背景には、彼が深く西洋音楽史と音楽理論を学び、また西洋音楽の演奏をかなり本格的に体験したことが大きく影響していたと思われる。このような経験は、明治20年代前半の日本人としては、きわめて稀なことであった。

現代の私たちは、モノフォニーの音楽の美しさとポリフォニーの音楽の美しさは、その質が異なっているというパラダイムの中に生きている。そして聴覚もそのように方向付けられている。しかし田中正平が「純正調の研究」を書いた1890年(明治23)当時のパラダイムの中では、上記のような田中の発想も、有り得べき一つの考え方であったと言えるかもしれない。今回は十分になし得なかったが、彼の思想を当時の「パラダイム」(渡辺裕 2002: 68)の中で丁寧に再考察してみることは、今後の課題の一つである。

田中が帰国した翌年の1900年(明治33)には、音響心理学者シュトゥンプ、C.が、ベルリン大学の心理学研究所にベルリン・フォノグラム・アルヒーフ(Berlin Phonogrammarchiv)を併設した。彼はここを拠点に、

アブラハム、O.とホルンボステル、E.を協力者として、発明後間もない蠟管蓄音機を利用し、諸民族の音楽を記録・採譜している。そして、やがてここがドイツの比較音楽学の中心地となっていった。川上貞奴一座の音楽を録音したのも、彼らであった(泉健 2004b: 82)。その川上貞奴一座に関する記事は、「Ost=Asien」にも数回掲載されている。それに関しては、今後また論究していくことにしたい。

【注】

- 1) この内1997年の修士論文は、著者と連絡が取れず複写の許可が得られていないため、筆者は未見。
- 2) 本稿では明治時代から1945年頃までの文献を引用することが多い。その際、旧字体は新字体に直し、漢数字はアラビア数字に直すことを原則とした。一部例外もある。また明治時代の新聞記事には、句読点がほとんど無いものが多く、筆者が適宜補った。「……」は文章を長く引用した場合の「中略」の意味であり、筆者が挿入したものである。森鷗外の『獨逸日記』からの引用のみは、原文通りの引用とした。
- 3) 今ではデジタル・ピアノなどで、簡単に純正調パイプオルガンの響きを体験することが可能になった。筆者の所有する楽器(Roland HP550G)では、パイプオルガンの音色で、ピュタグラス音律、純正律(長調)、純正律(短調)、中全音律、ヴェルクマイスター(第一技法・第三番)、キルンベルガー(第三法)、平均律の各音律を、簡単なボタン操作ですぐに切り替えることができる。また平均律以外の音律では、当然演奏する調に合わせて基音を変換することができる。
- 4) 従来とは多少異なる人名の表記は『ニューグローブ 世界音楽大事典』(講談社,1994)に従っている。
- 5) 『言語都市・ベルリン』では、1907年(明治40)のベルリン在住日本人数は55名(その内留学生は44名)と記されている(和田博文他 2006: 10)。

【引用文献・参考文献】

日本語文献は著者・編者の五十音順に、欧文献は著者・編者のアルファベット順に配列してある。欧文献の内、田中正平が1890年に『音楽学季刊誌』に論文を発表した際は、名前の「正平」が「Shohé」と綴られている。これはそのままの表記にした。ただし本稿のタイトルの英語題名では、「正平」は「Shohei」の綴りにした。

1: 日本語文献

浅川玉兎

1967「田中正平先生のこと」『邦楽の友』8月号pp.22-25.

天野健作

2002「ドイツ皇帝絶讃のオルガン発明者 田中正平」産経新聞「日本人の足跡」取材班編『日本人の足跡三 世紀を越えた「絆」求めて』(産経新聞ニュースサービス, 2002)pp.447-478.

伊沢修二・山住正己校注

- 1971『洋楽事始—音楽取調成績申報書』(平凡社)、原著は伊沢修二編著により1884年(明治17)に音楽取調掛の報告書として作成された。
- 泉 巖
1986『玉井喜作宅における寄せ書き 自明治33年3月30日—至明治39年3月15日』(覆刻私家版)
- 泉 健
1996「日本人と西洋音楽」高橋浩子他『西洋音楽の歴史』(東京書籍)pp.238-244.
2001「書評：Brenn, Wolfgang. Goerke, Marie - Luise hrsg., Berlin - Tôkyô im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997.」『音楽学』46巻3号, pp.171-173.
2002「『Ost=Asien』研究—その1.全目次—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集, pp.107-204.
2003「『Ost=Asien』研究—その2.人名注解；外国人編—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集, pp.33-71.
2004a「『Ost=Asien』研究—その3.人名注解；日本人編—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集, 43-79.
2004b「『Ost=Asien』研究—その4.全目次；独語版—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集, 81-179.
2004c「百年前のベルリンと曾祖父」『邦楽ジャーナル』12月号, 通巻215号, p.21.
2005「ベルリンの玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第55集, pp.27-50.
2006「文献に見る玉井喜作—没後100年を記念して—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第56集, 25-47.
2007「光市文化センターと玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第57集, pp.23-37.
2008「“Ost=Asien”における森鷗外『舞姫』(宇佐美濃守独訳)」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第58集, pp.27-50.
2009「北里関「日本の演劇」ベルリン, 1901」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第59集, pp.11-26.
2010「藤代禎助(素人)の生涯—瀧廉太郎、玉井喜作との接点を中心に—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第60集, pp.35-46.
- 伊藤完夫
1968『田中正平と純正調』(音楽之友社)
- 上野益三
1968『お雇い外国人3 自然科学』(鹿島研究所出版会)
- 内田英治
1967「T.C.メンデンホールの日本における研究業績について」『科学史研究』No.83, pp.133-136.
- 江崎公子
1979「国楽創成思想の成立過程についての一考察—明治7年から同20年までを中心として—」『研究紀要』(国立音楽大学)14集, pp.219-232.
- 遠藤宏
1948『明治音楽史考』(有朋堂)
- 小方厚
2007『音律と音階の科学』(講談社)
- 菊川兼男
1968「田中正平—淡路が生んだ世界的音響学者—」『三原文化』(三原高等学校)25号, pp.5-17.
1971『世界的音楽学者 田中正平博士』(田中正平博士顕彰会)吉川英史
1984「明治の日本音楽観」『日本音楽の美的研究』(音楽之友社) pp.111-128.
- 黒沢隆朝
1956『楽器の歴史』(音楽之友社)
1972『図説世界楽器大事典』(雄山閣)
- 白砂昭一
1986「メモリーを用いた純正調演奏手法の一案」角倉一朗他編『音楽と音楽学』(音楽之友社)pp.325-345.
第一高等學校編
1939『第一高等學校六十年史』(第一高等學校)
- 田口卯吉編
1886『大日本人名辭書』(經濟雜誌社)、復刻版『大日本人名辭書』全5巻(講談社, 1974)
- 田中正平
1904「我邦音楽の発達に就いて」大日本音楽会『音楽管見』(出版協会)、『音楽基礎研究文献集』12巻所収(大空社, 1991) pp.1-62.
1935「田中正平博士に懐旧談を訊く」『月刊楽譜』24巻1号, pp.40-53.(質問者；須永克己、野村光一)
1940a「純正調発案の動機」(講演記録)『日本音響学会誌』第2号, pp.33-39.
1940b『日本和声の基礎』(創元社)
- 田中館愛橘
1934a「科学雑纂—ツ橋から赤門へ(I)」『科学』4巻6号, pp.258-260.
1934b「科学雑纂—ツ橋から赤門へ(II)」『科学』4巻8号, pp.349-356.
1935「科学雑纂—石川千代松君の思ひ出」『科学』5巻4号, pp.166-167.
1940「科学雑纂—山川先生の伝を読む」『科学』10巻7号, pp.260-263.
1950「BUTURIGAKU OMOIDE」『日本物理学会誌』5巻6号, pp.312-322.
- 田辺尚雄
1946a「田中正平先生の思ひ出 上」『日本音楽』5月号, pp.22-23.
1946b「田中正平先生の思ひ出 下」『日本音楽』7月号, pp.25-27.
1946c「田中正平論」『音楽芸術』4月号pp.1-5.
1953a『音楽粹史』(日本出版協同)
1953b『続音楽粹史』(日本出版協同)
1965『明治音楽物語』(青蛙房)
1968「邦楽の大恩人田中正平博士」『邦楽の友』12月号, pp.16-19.

- 1969a 「田中正平博士の生い立ち」『邦楽の友』2月号, pp.16-19.
 1969b 「田中正平博士の逸話」『邦楽の友』3月号, pp.16-19.
 1969c 「田中博士と純正調理論」『邦楽の友』4月号, pp.16-19.

玉井喜作

1888 「履歴書」(6月に札幌農学校に提出)

手塚晃・石島利男編

2003 『幕末・明治期 海外渡航者人物情報事典』(雄松堂出版: CD-ROM版)

東川清一

1987 「『増五度と短六度はどちらがうか』について」『音楽理論を考える』(音楽之友社) pp.109-152.

東京大学百年史編集委員会

1984 『東京大学百年史 通史(一)』(東京大学)

富田仁編

1985 『海を越えた日本人名事典』(日外アソシエーツ)

1989 『海外交流史事典』(日外アソシエーツ)

中山茂

1978 『帝国大学の誕生—国際比較の中での東大』(中央公論社)

西原稔

1992 「K.プリングスハイムと日本和声の理論」『桐朋学園大学研究紀要』18集, pp.19-37.

根岸一美

1996 「ヴィルトゥオーゾとピアノ音楽」高橋浩子他『西洋音楽の歴史』(東京書籍) pp.161-166.

野村良雄

1968 「田中正平先生について」伊藤完夫『田中正平と純正調』(音楽之友社) pp.134-136.

パンツァー, P., クレイサ, J.

1990 『ウィーンの日本—欧州に根づく異文化の軌跡—』佐久間穆訳(サイマル出版会)

平島達司

1983a 『ゼロ・ビートの再発見—「平均律」への疑問と「古典調律」をめぐって—』(東京音楽社)

1983b 『ゼロ・ビートの再発見—技法篇—』(東京音楽社)

平塚知子

1997 「田中正平の音楽観と音楽活動—日本音楽の再認識におけるその影響」(東京大学比較文学比較文化研究室、1996年度修士論文)

1998 「『発達』する日本音楽—田中正平の理想と実践をめぐって—」『比較文学研究』71号, pp.109-128.

1999 「田中正平の〈音楽の発達〉ヴィジョンにおける「日本音楽」の評価」『東洋音楽学会第50回大会』発表要旨 pp.20-21.

2001 「お師匠さんが五線譜を知ったころ: 田中正平と日本の

音楽文化」『会報』(日本リズム協会)第28号

2003 「昭和の田中正平—「純正調」研究から日本和声へ」洋楽文化史研究会第18回例会報告要旨

2004 「田中正平の「純正調オルガン」開発の一端—田中の書簡から読むWalcker社との共同作業—」『音楽学』49巻3号, pp.178-180.

藤枝守

2007 『響きの考古学 増補』(平凡社)

堀内敬三

1977 『音楽五十年史』上下(講談社, 初版は鱒書房, 1942)

宮沢従一

1965 『明治は生きている』(音楽之友社)

森林太郎

1975a 『航西日記』『鷗外全集35巻』(岩波書店) pp.73-83.

1975b 『獨逸日記』『鷗外全集35巻』(岩波書店) pp.85-191.

渡辺裕

2002 『日本文化 モダン・ラブソディ』(春秋社)

2010 『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(中央公論新社)

渡辺正雄

1966 「T.C.メンデンホールの生涯と活動」『科学史研究』No.70, pp.113-123.

渡辺實

1977-1978 『近代日本海外留学生史』上下(講談社)

和田博文他

2006 『言語都市・ベルリン 1861-1945』(藤原書店)

2: 欧文献

Shohé Tanaka

1890 "Studien im Gebiet der reinen Stimmung." *Vierteljahrsschrift für Musikwissenschaft*. Nr.6, s.1-90.

Hartmann, Rudolf.

1997 "Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914." Berlin, Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin.

3: 映像資料、Web資料

財団法人民主音楽協会

2010 「田中式昭和オルガネットを展示・公開」『民音ニュース』

2010年7月7日

http://www.min-on.or.jp/topics/detail_268_.html

BSジャパン

2009 『ドイツ音楽の旅: ドイツ皇帝が愛した幻の楽器と日本人』10月16日19:00-20:55放映

毎日放送

1997 『過ぎし日のブラームス』9月6日15:00-16:24放映